

2025
共通テスト
直前対策問題集

第4回

国語

200点／90分

第4問 次の【文章Ⅰ】は室町時代の物語『しぐれ』、【文章Ⅱ】は南北朝時代の物語『しのびね』の一節で、『しぐれ』は『しのびね』を改作した物語である。【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】とも、愛する姫君とともに暮らしていた中将が、二人の仲に反対する父親の命令によって権勢家の娘と結婚させられることになり、中将が初めて権勢家の娘のもとに赴き、娘と対面する場面である。これらを読んで、後の問い（問1～4）に答えよ。なお、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】に付された①・②は内容が対応することを表している。（配点 45）

【文章Ⅰ】

① とかくするほどにその日にもなりにけり。中将殿をしきりに父大臣殿より呼びまゐらせ給ひけり。中将殿は臥し沈みて出でもやり給はず。御使しきなみにまゐりけり。姫君仰せけるやうは、「御心ざしだにも変はらぬものならば、契りはざりとも朽ちすまじ。遅く入らせ給へば、ひとへに大臣殿もわらはがしわざと思し召して、いかなる御使も候はば、恥づかしく候ふべし。今はとく出でさせ給へ」と、涙を押さへてのたまひければ、心ならず出でさせ給ひける。御襖には薰物たきしめて御直衣着せたてまつりけれども、ただ冥途へおもむく心して晴れもやり給はず。おとひ召して、「われ帰らむまでは御そばにありて慰めまらせよ。暁は帰るべし」とて、侍従にも暇乞ひ、車に召しければ、雑色、牛飼、御隨身、われもわれもと色めきて御供にまゐりければ、中将殿の心には牛頭馬頭の責めもかくやと、うとましくおぼえて、A 涙せきあへ給はず。

霰降り霜冴ゆる夜におき別れ身に魂もなくなくぞ行く

かやうにうちながめ、道すがら中有の野辺と思ひつつ、直衣の袖を絞りぞかねさせ給ひけり。

② さるほどに、右大臣殿には玉をみがきたるごとくにこしらへて待ちたてまつり給ひける。中将殿入り給へば、小舅の中將、少将出であひ給ひて、なのめならずにもてなしかしづき給ひけり。中将殿は、道すがら泣きつる涙に、顔面映ゆくて、人々の見

たてまつるも(ア)さすがにかたはらいたくて、とかくまぎらはして几帳(ウ)ま近く立ち入らせ給ふ。姫君(注9)を見たてまつり給へば、何となく空薫物はうちかほり、皆(注10)白襲(ミ)の十二(ニ)に、紅(ミ)の三重(ヘ)の御袴(ハ)、唐綾(カ)の二衣(キ)召して(イ)うちそばみ給へる気色、白う清げにあてやかなる有様なり。中将殿思し召しけるは、これもかの人を見ずは事欠けぬさまの人よとは思へども、ふるさとの人に思ひ合はすれば、色白く丈高くしてもものしげなる有様なり。御心のとまるべきやう、さらになかりけり。御介錯(カ)の女房たち、御乳母(メ)をはじめとして美女・端者(ヒ)に至るまで清げにて、(ウ)もてなしかしづきたてまつるを御覽(カ)するにも、あはれ、かの人をかく思ふ事なくうち添ひて過ごさばやと思ふに、つつむ涙はもれ出でてふるさとの人ぞ恋しき。

【文章Ⅱ】

①すでにその日にもなりぬれば、中将は日暮らし臥し給ひて、ひきつくろひ給ふこともなし。殿(注12)より「はやはやわたり給へ」と、呼び聞こえ給へば、つらく覚えて起きもあがり給はず、折ふし、霰降り寒き夜なるに、起き別れむ空も覺えず。姫君、

霰降り冴ゆる霜夜におき別れこよひばかりやかぎりなるらむ

とて、しのべどもせきあへ給はず。中将、

「いかでかはかぎりなるべき我が宿の心のいたやの霰降るとも

さらば、暁はとく参らむ。ならばぬ御ひとり寝こそ心苦しけれ。参らむほどは、尼上(注13)の御あたり近くおはせよ。ならばでひとり寝るは、もの恐ろしき心地するぞ」などのたまへば、衣(キ)ひきかづきて、ものものたまはず。なほ、出でもやり給はねば、とくと御前(注14)などそそのかし聞こゆ。

②かしこの有様いはむかたなく、大将殿(注15)、心をつくし給ひけむほどあらはれて、目もかかやく心地す。女房三十人ばかり、白き袴にてなみ居たり。ことども果てて、夜更くるほどに、御几帳おしやりて見給へば、松襲(マ)十ばかりに白き袴ぞ見ゆる。まづ、

居丈ゐたけのほどものものしく、額はれて、目大きに、色はあくまで白く、親の目にはよしと思ふらむと見えたりしも、まづふるさと人には、いひならぶべきかたもなし。大殿おほのうら籠りても、ふるさとの人の、いかにならはぬひとり寝を、つれづれと思ひ給ふらむ。男の心は定めなければ、今こそおろかならずといふともと思へる気色の、いはぬにしるく見えつるも思し出づるに、かなしければ、のたまふべき言の葉も覚えす。

(注) 1 しきなみ——あとからあとから続くさま。

2 御襖——中將の衣服。

3 おとひ——姫君の侍女。

4 侍従——姫君の乳母子。

5 牛頭馬頭——地獄で死者を責める鬼。

6 中有——死者が次の生を受けるまでさまよう期間。

7 右大臣殿——中將の結婚相手の邸やしや。結婚相手の父親は、【文章Ⅰ】では右大臣、【文章Ⅱ】では大将である。

8 小舅——結婚相手の兄弟。

9 姫君——ここでは結婚相手である、右大臣の娘。

10 皆白襲みなしろの十二——女性の装束。後出の「紅の三重の御袴、唐綾からあやの二衣」、【文章Ⅱ】の「白き袴」「松襲まつむす十ばかりに白き袴」も同じ。

11 美女・端者——侍女や召使い。

12 殿——中將の父親。

13 尼上——姫君の母親。【文章Ⅱ】では、中將が姫君とともに引き取り、一緒に住んでいる。

14 御前——貴人の先払いをする家来。

15 大将殿——中將の結婚相手の父親。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

24
～
26。

(ア) さすがにかたはらいたくて

- 24
- ① なんといても腹立たしいので
 - ② やはりきまりが悪いので
 - ③ そうはいうものの痛々しいので
 - ④ いかにも落ち着かないので
 - ⑤ よけいに恥ずかしくなるので

(イ) うちそばみ

- 25
- ① わずかに下を向き
 - ② ちよつと顔をそむけ
 - ③ そつとほほえみかけ
 - ④ 少し涙ぐみ
 - ⑤ さつと近くに寄り

(ウ) もてなしかしづきたてまつるを

- 26
- ① いつも介添えしていますのを
 - ② 恐れひれ伏し申し上げるのを
 - ③ 大切に世話をして差し上げるのを
 - ④ 大事に守りなさっているのを
 - ⑤ 敬いかしこまっていらっしゃるのを

問2 傍線部A「涙せきあへ給はず」とあるが、このときの中将の心情についての説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 右大臣家と姻戚関係になるためとはいえ、愛し合う自分と姫君とを無理やり引き裂いた父親の仕打ちに対して、怒りを抑えられないでいる。
- ② 姫君を残して右大臣の娘のもとへ出かける自分を、姫君の侍女たちも恨めしく思っているようなので、いっそう自責の念に駆られている。
- ③ このままだけでも引き留めていたら父親から非難されると言って、自分を右大臣の娘のもとへと出発させた姫君の態度に落胆している。
- ④ 鬼が地獄で死者を責めるように、右大臣はすぐに娘のもとへ来なかった自分を責め立てるだろうと思うと、つらく恐ろしいと感じている。
- ⑤ 右大臣の娘のもとへ向かうことが心底耐えがたいのに、随行する家来たちがこぞって意気揚々としている様子に嫌悪の情を抱いている。

問3 二重傍線部「男の心は定めなければ、今こそおろかならずといふとも思へる気色の、いはぬにしるく見えつるも思し出

づるに」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 「定めなければ」は、ここで結婚を断らないと二度と姫君に逢えなくなるといふ、中将の切羽詰まった心情を表している。
- ② 「おろかならずといふとも」の「とも」は逆接の仮定条件で、いくら賢明な中将でもという意味であり、後に「あてにできない」という内容が省略されている。
- ③ 「思へる気色」の「る」は自発の助動詞で、姫君が中将の言葉を信じようとはするものの、疑念を抱かずにいられない気持ちを表している。
- ④ 「いはぬにしるく」の「ぬ」は打消の助動詞で、口にこそ出さないけれども、不安を覚えている姫君の様子がはっきりわかるということを表している。
- ⑤ 「思し出づる」は尊敬の動詞で、中将の、姫君に対する敬意を表している。

問4 次に示すのは、授業で【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

教師 いま二つの文章を読みました。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】はよく似ていますね。一方で、違う点もあって、それぞれに特徴がありますね。みんなで考えてみましょう。

生徒A 先生がおっしゃるように共通点がたくさんあるなあ。

生徒B なるほど、【文章Ⅰ】も【文章Ⅱ】も **X** だね。

教師 二つの作品の全体を眺めてみると、

- 1 中將が不遇な姫君と出会い、一緒に暮らし始める。
- 2 中將が権勢家の娘と結婚させられ、姫君は、中將と一緒に暮らしていた家を出て行く。
- 3 姫君が帝に見初められ、中將への恋慕との板挟みになって苦しむようになる。
- 4 事情を知った中將が姫君への思いを断ち切って出家してしまう。
- 5 姫君は帝の后すくもとして栄華を極める。

といった展開も同じで、作品が成立した時代を考えると、【文章Ⅰ】は、【文章Ⅱ】を改作したと考えてよさそうですね。でも、細部に至っては違うところもあります。今度はそういった違う点に注意して考えてみましょう。

生徒C 一番の違いは、「霰降り」の和歌が、**Y** だと思うよ。

生徒A それもあるけど、**Z** も大きく違っているよ。

教師 それ以外にも、細かな点はいろいろあります。それらは、この物語を読む対象が意識されているからでしょう。つまり、その時代の読者の要求というか、嗜好しこうが違って、改作者はそれを敏感に汲み取とって物語を改作しているのです。物語は時代が生み出すものとも言えます。こうやって、同じ筋の物語が時代によってどのように変化し

たのか、平安時代の物語も含めて読み比べてみると、もっとおもしろい発見につながるのではないのでしょうか。

(i) 空欄 に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 中將が出発をしぶっているところ、権勢家が中將を盛大に出迎えるところ、結婚相手の容姿を描写するところなどの展開が同じ
- ② 姫君が中將の出発を促すところ、権勢家が一族総出で迎えるところ、女房や結婚相手の様子を描写するところなどの展開が同じ
- ③ 中將が父親の強い要請によって出発するところ、権勢家の接待の具体的な様子、結婚相手の描写の後に女房の描写が続くところが同じ
- ④ 使いの者が中將を無理やり連れて行くところ、権勢家の豪華な家具や調度品の様子、結婚相手の衣装の描写が詳細なところが同じ

(ii) 空欄 **Y** に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **30**。

① **【文章Ⅰ】**では、中将が、新しい妻のもとに行くことを引き留めないあなたの心は、この寒い夜のように冷たいのですねと、姫君の冷淡さを責める心情を詠んでいるけれども、**【文章Ⅱ】**では、姫君が、こんな寒い夜に私ひとりを残して出かけることは今夜かぎりにしてほしいと、中将に懇願する心情を詠んでいて、詠み手も内容も大きく異なっているところ

② **【文章Ⅰ】**では、中将が、寒々しい今夜のように、新しい妻ができることであなたとの仲は冷えきってしまうだろうと、将来を悲観する心情を詠んでいるけれども、**【文章Ⅱ】**では、姫君が、新しい妻のもとに行くのならば、私は今夜の霜のように冷たくなって死んでしまおうと、死を覚悟する心情を詠んでいて、詠み手も内容も大きく異なっているところ

③ **【文章Ⅰ】**では、中将が、恋しい人と別れて、正気を失った状態で泣きながら出て行くという、姫君と別れたくない心情を詠んでいるけれども、**【文章Ⅱ】**では、姫君が、私を置いて新しい妻のもとへ行けば、今夜が二人にとって最後になるだろうという、永遠の別れになるかもしれない不安な心情を詠んでいて、詠み手も内容も大きく異なっているところ

④ **【文章Ⅰ】**では、中将が、あなたを置いて出て行くとしても、魂はあなたのもとに置いていくので、新しい妻に心を通わせることなどないと、姫君への変わらぬ愛情を詠んでいるけれども、**【文章Ⅱ】**では、姫君が、新しい妻ができて、私たちの仲は今夜かぎりで終わらせたくない、将来への望みを詠んでいて、詠み手も内容も大きく異なっているところ

(iii) 空欄 **Z** に入る最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **31**。

- ① 中将の結婚相手について、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】ともに不美人だとする点は同じだが、【文章Ⅰ】では、上品な振る舞いはすばらしいと評価する一方、【文章Ⅱ】では、親から見てもどうしようもない女性として表現している点
- ② 中将の結婚相手について、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】ともに美人であるとする点は同じだが、【文章Ⅰ】では、姫君に取って代わるほどではないと評価する一方、【文章Ⅱ】では、色が白すぎて、姫君と違いすぎると言っている点
- ③ 中将の結婚相手について、【文章Ⅰ】では、欠点が見当たらないほどすばらしいと評価しているが、【文章Ⅱ】では、額は広く目は大きく、普通では考えられない容貌の持ち主だと言っている点
- ④ 中将の結婚相手について、【文章Ⅰ】では、姫君には劣っているものの、色白で美しい女性だとそれなりに評価しているが、【文章Ⅱ】では、姫君とは比べようがないほど不美人で魅力がないと書かれている点

第5問 次の【詩】は、江戸時代の僧六如りくによの作であり、【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】は【詩】に引用された故事の出典である。これらを読んで、後の問い（問1〜7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 45）

【詩】

移シテ住シテ愛あた宕たご山やま後、
賦カシテ示ス知チ己ニ

（注） 1 賦——詩を作る。

2 霜根——白髪。

3 満顛——頭すべて。

4 山砭水針——「砭」・「針」は鍼灸しんきゆう治療で用いる針。山谷自然を治療器具に見立てる。

霜（注2）根ラ自ル省（注3）満まん顛（ろ）新（タナ）

榮（ノ）辱（ノ）中（ニ）間（ク）置（ク）此（ノ） X

山（注4）砭（さん）水（へん）針（シ）医（注5）了（シ）俗（ラ）

迂（注6）經（けい）拙（けい）緯（り）織（ス）成（ラ）貧（ラ）

下（ル）車（ラ）馮（ふう）婦（ふう）嘲（あざ）須（けり）避（ハ）

設（ケル）醴（あま）楚（ざ）王（け）跡（ハ）已（ア）陳（ふる）

納（注7）納（タル）乾（けん）坤（こん）風（コン）月（ノ）地（チ）

清（注8）時（シ）宜（シク）着（ク）箇（注9）般（はん）民（ラ）

7 納納乾坤——「納納」は物を包み入れるさま。「乾坤」は天地。

8 清時——太平の世。

9 箇般民——この民。作者のこと。

【文章Ⅰ】

春秋時代、晋しんの馮婦ほうふは、素手で虎を打ち殺すほど粗暴であったが、後に立派な紳士になった。

晋人しんじん有あり馮婦ほうふ者なり。善搏うツモ虎こ、卒つひ為なる善士ぜんし。則すなは之の野の、有あり衆しゆ逐おつ虎こ。虎負たのみ之を。
 峒くまら、莫し之を敢へ撻ちか。望み見み馮婦ほうふ趨はし而して迎むか之を。馮婦攘かか臂がて下くだ車ぐるま。衆しゆ皆悦よろこ之を。
 其その為なる士し者なり笑わら之を。

（『孟子』による）

（注） 10 負お峒と——虎が山の奥まった険しい所を頼みにして威勢をはる。

【文章Ⅱ】

漢の高祖の弟である元王は、楚に領地を与えられて楚王となった。学問を好み学者を厚遇した。

元王敬うや礼れい申まを公こう等ら。穆ぼく生せい不たし耆な酒さけ。元王每置酒、常為穆生設せ。
 禮らい及およ王わう戊ぼ即すなは位ゐ常設じやうせ後忘わす設せ焉を。穆生退き日ひ可た以を逝ゆ矣なり。禮酒不た設せ。

設、王之意怠。不去楚人将。鉗我於市。称疾臥。

ケラレ 王 之 意 怠^ル 不^レ 去^ラ 楚 人 将^イ 鉗^{かん} 我^{セント} 於^ラ 市^ニ 称^{シテ} 疾^{やまひ} 臥^ト。

〔漢書〕による

(注) 11 申公——人名。学者。

12 穆生——人名。学者。申公の弟子。

13 戊——元王の孫。楚王の王位を継いだ。

14 鉗——首枷^{くみか}。

問1 波線部(ア)「巳」・(イ)「将」のここでの意味と、最も近い意味を持つ漢字はどれか。次の各群の①～⑤のうちから、そ

れぞれ一つずつ選べ。解答番号は 32・33。

(ア) 「巳」

32

⑤ ④ ③ ② ①

各 既 猶 必 固

(イ) 「将」

33

⑤ ④ ③ ② ①

尚 如 且 被 令

問2 空欄【X】に入る漢字と【詩】に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① 「故」が入り、第一句の「新」字と対になる七言絶句。
- ② 「人」が入り、形式の制約が少ない七言古詩。
- ③ 「子」が入り、頷聯がんれんと頸聯けいれんがそれぞれ対句になった七言律詩。
- ④ 「近」が入り、起承転結で構成された七言絶句。
- ⑤ 「身」が入り、第一句末と偶数句末に押韻する七言律詩。

問3 傍線部A「須避」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① まさにさくべし
- ② なほさくるがごとし
- ③ なんぞさけざる
- ④ いまださけず
- ⑤ すべからくさくべし

問4 傍線部B「望見馮婦、趨而迎之」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 「衆」が、虎退治で名を揚げた「馮婦」を虎狩りの邪魔になると思い、彼を追い払おうとしたということ。
 ② 「衆」が、虎退治で名を揚げた「馮婦」の見ている前で、虎に追われて殺されそうになっていたということ。
 ③ 「虎」が、虎退治で名を揚げた「馮婦」の姿を見て突進して来て、彼を食い殺そうとしたということ。
 ④ 「虎」が、虎退治で名を揚げた「馮婦」を見つけて逃げ出し、彼を畏怖するかのようであったということ。
 ⑤ 「衆」が、虎退治で名を揚げた「馮婦」を見かけて駆け寄り、彼に加勢してほしいと求めたということ。

問5 傍線部C「元王每置酒、常為穆生設醴」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 元王每置酒、常為穆生設醴 元王酒を置き、常に穆生と為す毎に醴を置く
 ② 元王每置酒、常為穆生設醴 元王酒を置くも、常に為むる毎に穆生醴を設けんや
 ③ 元王每置酒、常為穆生設醴 元王酒を置く毎に、常に穆生の為に醴を置く
 ④ 元王每置酒、常為穆生設醴 元王毎に酒を置けば、穆生の醴を設くるを為すを常とす
 ⑤ 元王每置酒、常為穆生設醴 元王毎に酒を置くは、常に穆生の醴を設くるが為なり

問6 傍線部D「可_レ以_レ逝_二矣」とあるが、穆生はどうしてこのように言ったのか。その説明として最も適当なものを、次の

① ～ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 甘酒が用意されなくなったので、新王の戌が自分への敬意をなくしたと思ったから。
- ② 新王の戌がいつも宴会ばかり開いているので、政治に対する情熱を失ったと思ったから。
- ③ 新王の戌が申公ばかりを優遇するので、自分は申公ほど評価されていないと思ったから。
- ④ 臣下である自分が甘酒など飲み続けたならば、新王の戌が自分を処刑すると思ったから。
- ⑤ このまま酒を飲み続けると、健康を損なって朝廷に参内できなくなると思ったから。

問7 【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を踏まえた【詩】の作者の心情の説明として最も適当なものを、次の① ～ ⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は 39。

- ① 戦乱の世の人々を救うのではなく、山谷での静寂を愛する落ち着いた心境。
- ② 俗世の名誉を求めるのではなく、貧しくても美しい自然の中で生きる喜び。
- ③ 山あいの美しい溪谷に居を移したものの、俗世の快樂をすべて失う悲しみ。
- ④ 友人や親戚のことを忘れて、寂しい自然の中で孤独に老いて死んでゆく決意。
- ⑤ 榮譽を求めてあくせくするよりも、豊かな自然の中で身体の健康を得る喜び。

(下書き用紙)

sample

2025
共通テスト
直前対策問題集

第4回

国語

sample

第4回

| 第3問 (20) | | | | | 第2問 (45) | | | | | | | 第1問 (45) | | | | | | | | | | 問題 番号 (配点) | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|----|----|----|----|---------------|------------|-----------|----|----|----|----|----------|---------------|----|----|----|----|----|----|----|----|------------------|----|----|----|----|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|------|
| 第3問 自己採点小計 | 問4 | 問3 | 問2 | 問1 | 第2問 自己採点小計 | 問7 (ii) | 問6 (i) | 問5 | 問4 | 問3 | 問2 | 問1 | 第1問 自己採点小計 | 問6 | 問5 | 問4 | 問3 | 問2 | 問1 | | | | | 設問 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 23 | 22 | 21 | 20 | | | | | | | | | | | | | | | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 解答番号 |
| | ④ | ① | ③ | ⑤ | | | | | | | | | | | | | | | ② | ③ | ② | ④ | ④ | | ③ | ⑤ | ① | ② | ⑤ | ⑤ | ① | ③ | ② | ① | ④ | ③ | ④ | ① | |
| 5 | 5 | 4 | ※ | | 3 | 3 | 5 | 5 | 6 | 6 | 6 | 5 | 6 | 6 | 7 | 8 | 7 | 7 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 配点 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 自己採点小計 | | | | | 自己採点小計 | | | | | | | 自己採点小計 | | | | | | | | | | 自己採点 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

※の正解は、順序を問わない。

| 第5問 (45) | | | | | | | | | | 第4問 (45) | | | | | | | | | | 問題 番号 (配点) | | | | | | |
|---------------|----|----|----|----|----|----|-----|-----|---------------|----------|----|----|-------|------|-----|----|-----|-----|------|------------------|----|----|----|----|----|----|
| 第5問 自己採点小計 | 問7 | 問6 | 問5 | 問4 | 問3 | 問2 | 問1 | | 第4問 自己採点小計 | 問4 | 問3 | 問2 | 問1 | | | 設問 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | (イ) | (ア) | | | | | (iii) | (ii) | (i) | | (イ) | (ア) | 解答番号 | | | | | | | |
| | | | | | | | 39 | 38 | | | | | 37 | 36 | 35 | | 34 | 33 | | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 |
| 2 | ① | ③ | ⑤ | ⑤ | ⑤ | ③ | ④ | ④ | ③ | ① | ④ | ⑤ | ③ | ② | ② | 7 | 7 | 7 | 6 | 6 | 4 | 4 | 4 | 配点 | | |
| 自己採点小計 | | | | | | | | | | 自己採点小計 | | | | | | | | | | 自己採点 | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

①はdに、②はbに、③はaに、④はcにそれぞれ適った説明になっているので適当である。

④の「資料Ⅲ」の筆者は、エチオピアの生活や文化を体験したために、すべてが円滑に進んでいく日本の仕組みに逆カルチャーショックを受けた」という説明は「資料Ⅲ」に書いてある通りである。しかし、そのことから「異文化を深く体験しすぎると『日本人としてのアイデンティティ』が脅かされることを教えてくれている」とまで言うことはできない。また、このようなことは、「留学の意義」には書かれていない。したがって、④が正解である。

第4問 古文

【出典】

【文章Ⅰ】

『しぐれ』

成立 室町時代

ジャンル 擬古物語

作者

未詳

内容

『しのびね』(文章Ⅱ)で取り上げた作品を、さらに室町時代に改作したといわれている。悲恋遁世譚(悲恋の結果、出家する話)の典型的な物語。

左大臣は、体調を崩した娘の回復を祈らせるため、息子の中将を清水寺に遣わした。その折、中将は時雨に降られて困っていた美しい姫君に傘を貸し、それがきっかけとなって姫君に好意を抱き、自邸に迎える。実は、姫君は、中納言であった人の娘で、将来は后になるべく大切に育てられていたが、早くに親を亡くして寂しく暮らしていた。

その後、中将は、父の左大臣に右大臣の一人娘との結婚を命じられ、抗いきれずに右大臣家の婿になるが、それでも姫君だけを愛し、右大臣の娘と夜を過ごそうとしなかった。そこで、右大臣の北の方と娘の乳母は、中将に呪いをかけて、姫君のことを忘れさせてしまう。こうして中将が右大臣邸から戻って来なくなり、そのうえ左大臣夫妻から、邸を出るようもちかけられ、前途を悲観した姫君は、どうしようもなく、姫君の乳母子である侍従の叔母で、宮中に勤めていた人のもとに身を寄せることにした。その結果、姫君は帝の目に止まり、強引に求愛される。それでも中将を慕い続ける姫君だったが、その頃、中将はすっかり姫君のことを忘れていたため、姫君は、帝の后になることを受け入れ、承香殿の女御となった。その後、呪いが解けて姫君のことを思い出した中将は、それまでのことを知り、両親にそれとなく別れを告げると宮中に出向き、侍従に姫君宛ての和歌を託して出家した。姫君は、帝の寵愛を一身に受け、皇子や皇女にも恵まれて栄えるが、心の中では中将と過ごした日々を懐かしく思い続けた。

なお、本文は、新日本古典文学大系『室町物語集 下』所収の『しぐれ』

〔沢井耐三校注 岩波書店刊〕によったが、問題文としての体裁を整えるために、一部表記を改めている。

【文章Ⅱ】

『しのびね』

成立 南北朝時代

ジャンル 擬古物語

作者 未詳

内容 平安時代末期に成立した物語が、後に散逸したので、南北朝時代に

改作したもの。悲恋遁世譚の典型的な物語。

内大臣を父に持ち、当代随一の貴公子として世評の高い中将は、姫君と結婚して、姫君を尼上ともども乳母子の邸に引き取った中将は、姫君との間に若君を儲けて幸せに暮らしていたが、二人の仲を反対する父の内大臣の意向によって、左大将の娘と結婚する。姫君は、さらなる父の内大臣の妨害によって中将の前から姿をくらすことになり、尼上の知友である宮中の内侍の局のところに身を寄せるが、そこで帝に寵愛されるようになる。その様子を垣間見た中将は、姫君と若君の幸福を祈って秘かに出家する。姫君は、帝との間に儲けた若宮が東宮に立つと中宮となり、若君に父である出家した中将の行方を捜させる。立派に成長した若君と再会した中将は、中宮や東宮の現状を耳にし、憂き世への執着が断ち切れずに苦しむ。

なお、本文は、中世王朝物語全集『しのびね しら露』（大槻修・田淵福子校訂・訳注 笠間書院刊）によったが、問題文としての体裁を整えるために、一部表記を改めている。

【本文解釈】

【文章Ⅰ】

① あれこれするうちにその（中将が右大臣の娘のもとへ行かなければならぬ）当日にもなりました。中将殿をしきりに父の大臣殿のもとから呼び出し申し上げなされた。中将殿は横になったまま気がふさいですっかり出る

こともしなされない。（父の大臣からの呼び出しの）ご使者はあとからあとから続いて参上した。姫君がおっしゃったことは、「あなたさまの私に対する）ご愛情さえも変わらないものならば、（私たちの）縁はいくらなんでも駄目になることはないだろう。（右大臣さまのお嬢さまのもとに）なかなかお入りにならないと、ひとえに（あなたの父である）大臣殿も私のしわざだと思ひになって、どのような（父の大臣殿からの厳しい言葉を伝える）ご使者でもございますなら、恥ずかしいに違いありません。今は早くお出かけになってください」と、涙を抑えておっしゃったので、（中将は）心ならずもお出かけになった。（仕える者が）御衣には薫物を焚きしめて御直衣を着せ申し上げたけれども、（中将は）ただあの世へ向かうような気分がしてすっかり晴れやかにもなりなされない。（姫君の侍女の）おとひをお呼びになって、「私が帰るような時までは（姫君の）おそばにいて慰め申し上げよ。夜明け前には帰るつもりだ」と言って、（姫君の乳母子の）侍従にも別れを告げ、車にお乗りになったところ、下男や、牛の世話係や、従者たちが、自分も（供をする）自分も（供をする）」と活気づいてお供に参上したので、中将殿の心の中では地獄の鬼の責めもこのようであるのだろうか、不快に感じられて、涙をこらえることができなされない。

霰降り……霰が降り、霜が、冷え冷えと感ぜられる夜に降りて、（恋しい人と）起きて別れて、我が身には魂もないような気持ちで泣きながら行くことだ。

このように歌を詠み、道々死後の世界（にあるようなものだ）と思いつつ、直衣の袖を絞るかね（るほど涙を流し）なされた。

② そうこうしているうちに、右大臣の邸では宝石を磨いたように（美しく）支度をして（中将を）お待ち申し上げなされた。中将殿が（邸に）お入りになると、小舅にあたる中将と、少将がお出迎えになって、並一通りでなくおもてなしなされた。中将殿は、（こちらに来る）道中で流してしまった涙で、顔を合わせるのが恥ずかしくて、人々が（中将を）見申し上げるのも（中将にとって）やはりきまりが悪いので、あれやこれやと目立たないようにして（姫君の部屋の）几帳のすぐ近くまでお入りになった。（右大臣の）姫君を拜見しなされると、どこからともなく漂ってくる焚きしめた香が薫り、

(内側に着ている) 桂十二枚がすべて白である装束に、紅の綾などを三枚重ねた袴と、模様を浮き織りにした(上衣として)二枚重ねた桂をお召しになつて(顔を見られないように)ちょっと顔をそむけなさつていらつしやる様子は、(色が)白くきれいで上品な様子である。中将殿がお思ひになつたことは、この人も(自邸に置いている)あの姫君に(私が)出会つていなかったら不足のないありさまの人だよと(心中で)は思ふけれども、なじみの土地の人(自邸の姫君)と思ひ比べると、色が白く座高も高くていかめしい様子である。(中将の)お気持ち(この姫君に)ひかれるであろうことは、まったくなかった。(右大臣の姫君に)付き添つてお世話をする女房たちは、御乳母をはじめとして侍女や召使いの女にいたるまできれいで、(姫君を)大切に世話をして差し上げるのをご覧になるにつけても、(中将は)ああ、あの(自邸にいる)姫君をこのように思ひわづらうことなく自分のそばに置いて暮らしたいものだと思うと、こらえていた涙はこぼれ出さななじみの土地の姫君が恋しく思われる。

【文章Ⅱ】

① 早くもその日にもなつてしまつと、中将は一日中横になりなさつて、(結婚の支度を)整えなさることもない。(日が暮れていくと)父の大臣殿から「早く早くおいでなさい」と、呼び申し上げなさるので、(中将は)つらく思われて起き上がりもなさらず、ちょうどその時は、霰が降り寒い夜であるので、(こんな夜に姫君と)起きて別れ(て新しい妻のもとへ出かけ)るような心持ちも思われない。姫君が、

霰降り……霰が降り、冷え冷えと感じられる霜が降りているような夜に、(あなたは私のもとから)起きて別れ(て出て行き)、今宵かざりで(二人の仲も)最後であるのだろうか。

と詠んで、(涙を)こらえようとするけれどもとどめることができなさらない。中将は、

「いかでかは……どうして(今宵が)二人の仲の最後であろうか、いや、最後であるはずがない。私の家の板屋の上に霰が降るように私の心につらい出来事が降りかかっても。

それでは、(明日の)夜明け前には早く参上しよう。慣れない御独り寝は氣

の毒だ。(私が)参上するような頃までは、尼上のおそば近くにいらつしやる。慣れないで独りで寝るのは、なんとなく恐ろしい気持ちがあるものだ」などとおつしやると、(姫君は頭から)衣を被つて、何もおつしやらない。(中将は)依然として、出て行つてしまいなさらないので、早く早くと先払いをする者たちがせき立て申し上げる。

② あちらの(大将邸の)様子はなんとも言いようがなく、大将殿が、(財力を頼りに)心を尽くしなさつたという様子が表に出ていて、目にもまばゆいほど輝く気持ちがする。女房が三十人ほど、白い袴で並んで座っている。(婚礼初日の)儀式が終わつて、夜が更ける頃に、(中将が大将の娘の部屋の)御几帳を押しやつて見なされると、松襲を十枚ほど(着ているところ)に白い袴(を着た娘)が見える。まず、座高の高さが堂々とした感じで、額は盛り上がつて、目が大きいうえに、色はどこまでも白く、親のひいき目には美しいと思つているのだからと見えたことにつけても、まずなじみの土地の姫君には、言い比べることができそうにもない。(中将は)お休みになつても、なじみの土地の姫君が、どんなに慣れない独り寝を、所在なくさびしくお思ひになつていられるだろうか(と気にかかる)。男(というもの)の心は変わりやすいので、今は(私への愛情が)いいかげんではないと(中将が)言うとしても(今後はどうなるかわからない)と思つていた(姫君の)様子が、(口に出して)言わないでもはつきりと見て取れたことも思ひ出しなされると、(中将は)悲しいので、(目の前の大将の娘に)おつしやるのにふさわしい言葉も思いつかない。

【設問解説】

問1 語句解釈の問題

(ア)

| | | |
|-----------|----------|------|
| 副詞 | 形容詞 | 接続助詞 |
| | ク活用 | |
| 「かたはらいたし」 | 連用形 | |
| さすがに | かたはらいたくて | |

「さすがに」

- 1 そうはいつでもやはり。
*前述の内容をいったん肯定して認めながら、それに相反することを後ろに示す場合。
- 2 なんととってもやはり
*予想される通りの結果だと肯定的に言う場合。

「かたはらいたし」

- 1 みつともない。見苦しい。にがにがしい。腹立たしい。
*自分自身がはたから見られる場合。
- 2 きまりが悪い。恥ずかしい。
*自分自身がはたから見られる場合。
- 3 気の毒だ。かわいそうだ。
*自分自身がはたから見られる場合。

「さすがに」の解釈としては、①「なんととっても」、②「やはり」、③「そうはいつでももの」が適当である。「かたはらいたし」の解釈としては、①「腹立たしい」、②「きまりが悪い」、③「痛々しい」、④「恥ずかしくなる」が適当である。接続助詞「て」はすべて「ので」と解釈しているので、①・②・③から正解を選ぶのは文脈によるしかない。

文脈を確認すると、傍線部の直前に「中将殿は、道すがら泣きつる涙に、顔面映ゆくて、人々の見たてまつるも」とあるように、右大臣邸に行くあいだ泣いていた中将は、邸の中に入って、右大臣家の人々と顔を合わせるのだから、「面映ゆく」、つまり、相手と顔を合わせるのが恥ずかしいと思うのだから、②「きまりが悪い」は文脈に合う。①「腹立たしい」、③「痛々しい」では中将のこの時の心情の表現としては文脈に合わない。正解は②である。

(イ)

「うちそはむ」「マ行四段活用動詞」

- 1 顔をそむける。横を向く。
- 2 ひがむ。すねる。

*「うち」は接頭語で、動詞の上について、調子を整えたり、意味を強めたりするが、文脈によっては、「ちよつと。少し。すつかり。ぱつたり。ふと」といった意味を添える場合もある。

「うちそはむ」の解釈としては、②「ちよつと顔をそむけ」だけが適当である。

文脈を確認すると、傍線部の前に、「姫君を見たてまつり給へば」とあり、中将が右大臣の娘を見ている。そして、「皆白襲の……唐綾の二衣召して」とその娘の衣装の説明があつて、その後傍線部が続いている。傍線部は、中将の見たその娘の様子を表現しているのので、②「ちよつと顔をそむけ」と解釈するのは正しい。正解は②である。

(ウ)

| | | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|---|----------|
| 動詞 サ行四段活用 「もてなす」 連用形 もてなし | 動詞 カ行四段活用 「かしづく」 連用形 かしづき | 動詞 ラ行四段活用 「たてまつる」 連体形 たてまつる | 格助詞 を |
|---------------------------------------|---------------------------------------|---|----------|

「もてなす」

- 1 執り行う。処理する。
- 2 ふるまつ。
- 3 世話をする。大切にする。
- 4 饗応する。歓待する。

「かしづく」

- 1 大切に育てる。
- 2 世話をする。

「たてまつる」

- 1 「飲む・食ふ・着る・乗る」の尊敬語
お飲みになる。召し上がる。お召しになる。お乗りになる。

- 2 「与ふ・贈る」の謙讓語 差し上げる。献上する。
 3 〈謙讓の補助動詞〉くし申し上げる。おくする。くして差し上げる。

「もてなす」の前記3と「かしづく」の前記1・2は、ほぼ同じ意味である。このように同じような意味を持つ語を連続させて用いることがある。一種の強調表現であるが、その場合の解釈は、二つの語を一緒にして考える必要がある。①「いつも介添えし」は、「介添えし」は適当であるが、「いつも」がどちらの語からも解釈できない。②「大切に世話をし」は二語の解釈として適当である。③「大事に守り」も適当である。④「恐れひれ伏し」と⑤「敬いかしこまつて」は二語のどちらの意味からも解釈できない。「たてまつる」は、動詞の連用形に接続しているので、前記3の謙讓の補助動詞である。その解釈としては、①「く申し上げる」、②「くして差し上げる」が適当である。格助詞「を」は、すべて「のを」と解釈している。よって、正解は③である。

文脈を確認すると、傍線部の前に、「御介錯の女房たち、御乳母をはじめとして美女・端者に至るまで清げにて」とあり、右大臣の娘に仕えている者たちは、女房や乳母、召使いに至るまでござれいで、その人たちが、右大臣の娘を「もてなしかしづきたてまつる」のだから、③は文脈からも正しいことがわかる。

問2 登場人物の心情についての説明問題

| | | |
|-----------------|--------|-----|
| 名詞 | 動詞 | 助動詞 |
| 八行下二段活用 | 八行四段活用 | 打消 |
| 「せきあふ」 | 「給ふ」 | 「ず」 |
| 連用形 | 未然形 | 終止形 |
| せきあへ | 給は | ず |
| 涙を こらえることができ | なさら | ない |

「せきあふ」

- 1 (流れ出るものを)こらえる。こらえてせき止める。

*打消表現と呼応する。

「給ふ」(八行四段活用)

- 1 「与ふ」の尊敬語 お与えになる。くださる。
 2 〈尊敬の補助動詞〉くなさる。おくになる。

設問は、涙をこらえることができな中將の心情を聞いている。冒頭から傍線部に至るまでの中將の心情を表す直接的な表現(破線部)と、その心情が生じる原因や対象は次のようになっていいる。

i 中將殿をしきりに父大臣殿より呼びまゐらせ給ひけり。中將殿は臥し沈みて出でもやり給はず。

ii 父親から結婚相手の邸に行くようにしきりに呼び出しがかかるが、行きたくない中將は横になつたまま沈み込んでいいる。

iii 御使しきなみにまゐりけり。姫君仰せけるやうは……涙を押さへてのたまひければ、心ならずぞ出でさせ給ひける。

iv 父親からしきりに使者が来るため、姫君が、「中將の私への愛があれば、二人の縁が切れることはないが、中將が行かなければ私が行かせないからだ」と父親が邪推するだろうから早く出発してほしい」と涙を抑えて訴えるので、中將はしぶしぶ結婚相手のところへ出発する。

v 御襖には薰物たきしめて御直衣着せたまつりけれども、ただ冥途へおもむく心して晴れもやり給はず。

vi それなりの装いをさせられて出かけるのだが、結婚相手のところに行くのは、まるであの世に行く、つまり、行きたくない死後の世界に行くかのようにいでいでやでたまらない。

vii おとひ召して、「われ帰らむまでは御そばにありて慰めまゐらせよ。暁は帰るべし」とて、

viii この部分に心情を表す直接的な表現はない。姫君に仕える侍女たちに姫君の世話を頼んでいる。

ix 侍従にも暇乞ひ、車に召しければ、雑色、牛飼、御隨身、われもわれもと色めきて御供にまゐりければ、中將殿の心には牛頭馬頭の責めもかくやと、うとましくおぼえて、

v 侍従にも暇乞ひ、車に召しければ、雑色、牛飼、御隨身、われもわれもと色めきて御供にまゐりければ、中將殿の心には牛頭馬頭の責めもかくやと、うとましくおぼえて、

「しる」

- 1 はっきりしている。きわだっている。
 - 2 予想通りだ。本当にその通りだ。
- * 2は「しるく」の形の時。

二重傍線部の前に、
 大殿籠りても、ふるさとの人の、いかにならはぬひとり寝を、つれづれ
 と思ひ給ふらむ。

とある。中将が大將邸でその娘と寝る時に「ふるさとの人」、つまり、姫君が独りさびしく寝ていることを思いやっている。

二重傍線部の終わりにある「思し出づる」に注目すると、前記のように大將邸で中将が姫君のことを思いやっている場面なので、「思し出づる」も中将の動作だとわかる。そうなると、思い出した対象である「思へる気色の、いはぬにしろく見えつる」は、大將邸に来る前に、姫君が思っている様子を言っていることになる。さらに、引用の格助詞「と」によって導かれる「男の心は定めなければ、今こそおろかならずといふとも」の部分が「思へる」の内容であると理解され、その主体は姫君である。これを踏まえて、前記品詞分解の囲みの現代語訳を、わかりやすく主体や対象を補って解釈すると次のようになる。

男(といふもの)の心は変わりやすいので、今は(私への愛情が)いいかげんではないと(中将が)言うとしても(今後はどうなるかわからない)と思っていた(姫君の)様子が、(口に出して)言わないでもはっきりと見て取れたことも(中将は)思い出しなさんと、

「いふとも」と「の」とも「と」ととのあいだの補いは、「男の心は定めなければ」を理由にして、「今こそおろかならずといふ」の後ろに、「(たとえ)……としても」と訳す「とも」でつながる内容である。したがって、前記のように「今後はどうなるかわからない」つまり、「あてにならない」といった内容になる。

①は、全体が不適當である。「定めなければ」は、前記のように、男性一般によくある女に対する愛情が定められないこと、つまり、いつ、愛情が冷めてしまつて、他の女性を愛するようになってしまふかわからないということ

言っており、大將の娘との結婚を断ることを言っているのではない。よつて、それを前提にする「二度と姫君に逢えなくなる」という、中将の切羽詰まった心情も不適當である。

②は、「とも」を「逆接の仮定条件」とするのは文法的に正しいが、「いくら賢明な中将でも」とするところが不適當である。前記のように「おろかならず」は、中将の姫君への愛情がいかげんでないということであり、それを中将が姫君に「(たとえ)言うとしても」と解釈されるので、「賢明な中将」という意味ではない。なお、「あてにはできない」という内容が省略されている」は、前記のように正しい。

③は、「る」を「自発の助動詞」とするのが不適當である。前記のように「る」は八行四段活用動詞「思ふ」の已然形(命令形)に接続しており、完了・存続の助動詞「り」の連体形である。なお、「姫君が中将の言葉を信じようとはするものの、疑念を抱かずにいられない気持ち」とするのは前記の解釈からも正しい。

④は、正解である。前記のように「ぬ」は、八行四段活用動詞「いふ」の未然形に接続しているので、「打消の助動詞」で間違いない。「いはぬに」を、「口にごそ出さないけれども、不安を覚えては姫君の様子」と解釈するのは、前記の解釈にあるように正しい。さらに、「しるく見えつる」を「はっきりわかる」とするの、「しるし」の意味から正しい。

⑤は、「思し出づる」を「尊敬の動詞」とするのは正しいが、「中将の、姫君に対する敬意」が不適當である。これは地の文にあり、中将が思い出したのだから、敬意の方向は、作者の中将に対する敬意を表している(以下の「敬意の方向」を参照)。

「敬意の方向」

| | | |
|-------|-----------|---------------------------------|
| 1 尊敬語 | 地の文↓「作者」の | 「動作の主体」に対する敬意 |
| 2 謙讓語 | 地の文↓「作者」の | 「動作の受け手(客体)」に対する敬意 |
| 3 丁寧語 | 地の文↓「作者」の | 「読み手」に 「語り手」の「聞き手」に 対する敬意 |

問4 【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】のありようについての問題

授業で【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】について教師と生徒が話し合う場面が設定されているが、設問を見る限り本文の内容読解問題である。それぞれの空欄の選択肢に合う本文の該当箇所を探し、その内容と選択肢とを吟味する必要がある。

(i) 生徒Aが、「共通点がたくさんあるなあ」と言っていることに、生徒Bが同意し、それを確かめている部分が空欄Xである。共通点がどこにあるかを検討するのだが、先に選択肢を確認すると、すべて文章の展開について述べていることがわかる。まず、本文の展開の仕方について細部の描写の違いは無視して、おおまかに内容的な共通点と相違点とを押しさえると以下のようになる。

【文章Ⅰ】

① 出発の場面

- 1 右大臣邸へ行く当日
 - 2 父親からの催促
 - 3 ぐずぐずしてなかなか起きない中将
 - 4 しきりに来る父親からの使者
 - 5 姫君による中将の説得
 - 6 しぶしぶ出かける中将
 - 7 中将の装いと心情
 - 8 中将から姫君の侍女たちへの言葉
 - 9 従者たちの様子とそれに対する中将の心情
 - 10 その時の心情を詠んだ中将の和歌
 - 11 道中の中将の様子
- ② 右大臣邸の場面
- ① 右大臣邸のありさま
 - ② 出迎えの人々と中将に対する態度
 - ③ 出迎えの人々への中将の対応
 - ④ 右大臣の娘のありようと中将の感想
 - ⑤ 右大臣の娘に仕える召使いのありようと娘への態度
 - ⑥ 中将の姫君への思い

【文章Ⅱ】(数字は【文章Ⅰ】に対応している)

① 出発の場面

- 1 大将邸へ行く当日
 - 2 父親からの催促
 - 3 ぐずぐずしてなかなか起きない中将
 - 10' 同じ語句が含まれる姫君が詠んだ和歌と、中将の返歌
 - 8' 姫君に母親と一緒にいるようにとの中将の言葉
 - 9' 中将をせき立てる従者たちの様子
- ② 大将邸の場面
- ① 大将邸のありさま
 - ⑤ 大将の娘に対する召使いのありよう
 - ④ 大将の娘のありようと中将の感想
 - ⑥ 中将の姫君への思い
 - ⑦ 中将の大将の娘への対応

①は、正解である。「中将が出発をしぶっているところ」は、①3のように共通している。「権勢家が中将を盛大に出迎えるところ」は、②①のように共通している。「結婚相手の容姿を描写するところ」は、②④のように共通している。

②は、まず、「姫君が中将の出発を促すところ」が不適当である。①5のように【文章Ⅰ】にはあるが、【文章Ⅱ】にはない。さらに、「権勢家が一族総出で迎えるところ」も②②のように【文章Ⅰ】にはあるが、【文章Ⅱ】にはない。「女房や結婚相手の様子を描写するところ」はどちらにもある。

③は、まず、「権勢家の接待の具体的な様子」が不適当である。【文章Ⅰ】には、②②のようにあるが、【文章Ⅱ】にはない。さらに、「結婚相手の描写の後に女房の描写が続くところ」が不適当である。【文章Ⅰ】では、②④・⑤と結婚相手→女房の順番で間違いないが、【文章Ⅱ】は②⑤↓④と順番が逆である。「中将が父親の強い要請によって出発するところ」はどちらにもある。

④は、「使いの者が中将を無理やり連れて行くところ」が不適当である。「無理やり連れて行く」ことはどちらの文章にもない。【文章Ⅰ】の①9は中

将が思っているだけで、実際に使いの者が無理やり連れて行ったのではない。さらに、「権勢家の豪華な家具や調度品の様子」も不適當である。どちらにも①のように中将を迎えるにあたって邸を磨き上げているが、豪華な家具・調度品についての描写はない。「結婚相手の衣装の描写が詳細なところ」はどこにもある。

(ii) 教師が「細部に至っては違うところもあります」と言った後の生徒Cの発言「一番の違いは、『霰降り』の和歌が」の後に空欄 Y があるので、まず、それぞれの和歌を見てみよう。

【文章Ⅰ】の和歌

| | | | | | | | | | | |
|------|-----|----------|-----|------|---------|------|-----|----|----|--------|
| 名詞 | 動詞 | 名詞 | 動詞 | 名詞 | 格助詞 | 動詞 | 名詞 | 動詞 | 名詞 | 動詞 |
| 霰 | 降り | 霜 | 牙ゆる | 夜 | に | おき | 別れ | 置 | く | 行 |
| 霰が降り | 降り | 霜が冷え冷えする | 牙ゆる | 夜に | に | おき | 別れ | 置 | く | 行 |
| 「降る」 | 連用形 | 「牙ゆ」 | 連体形 | 「起く」 | カ行上二段活用 | 「別る」 | 連用形 | 「置 | く | カ行四段活用 |
| | | | | | | | | | | |

【文章Ⅱ】の和歌

| | | | | | | | | | | |
|------|-----|------|-----|------|---------|------|-----|----|----|--------|
| 名詞 | 動詞 | 名詞 | 動詞 | 名詞 | 格助詞 | 動詞 | 名詞 | 動詞 | 名詞 | 動詞 |
| 霰 | 降り | 霜夜 | に | 霜の夜 | に | おき | 別れ | 置 | く | 行 |
| 霰が降り | 降り | 霜の夜 | に | 霜の夜 | に | おき | 別れ | 置 | く | 行 |
| 「降る」 | 連用形 | 「牙ゆ」 | 連体形 | 「起く」 | カ行上二段活用 | 「別る」 | 連用形 | 「置 | く | カ行四段活用 |
| | | | | | | | | | | |

| | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|------|------|
| 名詞 | 副助詞 | 係助詞 | 名詞 | 助動詞 | 助動詞 |
| 今夜 | 限定 | 疑問 | かぎり | 断定 | 現在推量 |
| こよひ | ばかり | や | なる | 「なり」 | 「らむ」 |
| だけ | ばかり | や | なる | 連体形 | 連体形 |
| | | | である | | の |
| | | | の | | だ |
| | | | ら | | む |
| | | | む | | か |

【文章Ⅰ】の和歌の「おき」は、「霜」との関連から霜が降りることを意味する「置き」と、「別れ」との関連から起きて別れることを意味を表す「起き」との掛詞である。また、「なく」は、「魂も」とのつながりからすると、「魂もなくなる（「茫然自失の状態」の意味を表す「無く」で、「行く」とのつながりからすると、泣きながら行くの意味を表す副詞「泣く泣く」の「泣く」との掛詞である。詠み手は、「中将殿の心には牛頭馬頭の責めもかくやと、うとましくおぼえて、涙せきあへ給はず」とあるように中将である。右大臣の娘と結婚するために愛する姫君と別れて出て行く中将が詠んだ和歌とすると、「おき別れ」の主体は中将、「身に魂も無く」は中将自身の魂がなくなることである。当然「泣く泣くぞ行く」は中将が姫君と別れて右大臣の娘のところ泣きながら行くこと。したがって、以下のようなことになる。

霰が降り、冷え冷えと感じられる夜に霜が降りて、(悲しい人と) 起きて別れて、(我が身には) 魂も無いような気持ちで泣きながら行くことだ。

一方、【文章Ⅱ】の和歌の「おき」にも「置き」と「起き」とが掛けられている。この和歌は、直前に「姫君」とあることから、中将が右大臣の娘と結婚するために姫君を置いて出て行く時に姫君が詠んだものだとわかる。「おき別れ」は中将が主体であるが、それに続く、「こよひばかりやかぎりなるらむ」は、今夜だけで最後になるだろうと推量しているのだから、姫君が二人の関係が今夜で終わることを推量しているものだと考えられる。それを踏まえて解釈すると以下のようなことになる。

霰が降り、冷え冷えと感じられる霜が降りているような夜に、(あなたは私のもとから) 起きて別れて(出て行き、今宵かぎり)で(二人の仲間)最後であるのだろうか。

①は、【文章Ⅰ】の和歌を「新しい妻のもとに行くことを引き留めないあ

なたの心」とするのが不適當である。前記のように姫君が中将を引き留めな
いことを詠んだ和歌ではない。よって、それを前提にした「この寒い夜のよ
うに冷たいですねと、姫君の冷淡さを責める心情」も不適當である。【文
章Ⅱ】の和歌についても「姫君が、こんな寒い夜に私ひとりを残して出かけ
ることは今夜かぎりしてほしい」とするのが不適當である。前記のように
「かぎり」になるのは二人の関係であって、中将が出かけることを最後にす
るということではない。よって、「中将に懇願する心情」も不適當である。

㊸は、【文章Ⅰ】の和歌を、「新しい妻ができることであなたの仲は冷え
きってしまうだろう」とするのが不適當である。前記のように「牙ゆる」は
霜の降りた今夜のことを言っているだけで二人の関係を言っているのではな
い。さらに、「将来を悲観する心情」を詠んでいるわけでもなく、右大臣の
娘のところに行く自分は「魂もなく」なってしまうと詠んでいるだけであ
る。【文章Ⅱ】の和歌も、「冷たくなって死んでしまおうと、死を覚悟する心
情」とするのが不適當である。前記のように、この和歌からは姫君が死を覚
悟した内容はまったく読み取れない。

㊹は、正解である。【文章Ⅰ】の和歌を、「中将が、恋しい人と別れて、正
気を失った状態で泣きながら出て行くという、姫君と別れたくない心情を詠
んでいる」とするのは、前記の解釈から正しい。【文章Ⅱ】の和歌の、「姫君
が、私を置いて新しい妻のもとへ行けば、今夜が二人にとって最後になるだ
ろうという、永遠の別れになるかもしれない不安な心情を詠んで」という説
明も、前記の解釈から導ける内容である。

㊺は、【文章Ⅰ】の和歌を、「魂はあなたのもとに置いていく」とするのが
不適當である。前記のように「魂もなく」とは言っているが、「あなたのも
とに置いていく」とは言っていない。それを前提にした「新しい妻に心を通
わせることなどないと、姫君への変わらぬ愛情を詠んでいる」も和歌自体か
らは導けない内容である。【文章Ⅱ】の和歌についても「今夜かぎりですら
も導けない」とするのは和歌の内容とは正反対である。よって、当然「将
来への望みを詠んでいて」とするのも正反対の内容である。

㊻ 生徒Cの違いの発言を踏まえて、生徒Aが別の違いを指摘している。
選択肢を見ると、前記㉔にある結婚相手のありようについて問題にしてい
ることがわかる。それぞれの該当箇所は以下のようである。

【文章Ⅰ】

a 何となく空薫物はうちかほり、皆白襲の十二に、紅の三重の御袴、
唐綾の二衣召して

b うちそばみ給へる気色、白う清げにあてやかなる有様なり。

c 中将殿思し召しけるは、これもかの人を見ずは事欠けぬさまの人よ
とは思へども、

d ふるさとの人に思ひ合はずれば、色白く丈高くしてもものものしげな
る有様なり。

e 御心のとまるべきやう、さらになかりけり。

【文章Ⅱ】

f 松襲十ばかりに白き袴ぞ見ゆる。

g まづ、居丈のほどもものしく、額はれて、目大きに、色はあくま
で白く、

h 親の目にはよしと思ふらむと見えたりしも、

i まづふるさとの人には、いひならぶべきかたもなし。

【文章Ⅰ】の a は、右大臣の娘の着ている服や薫りについての記述。 b は、
娘は色が白く、容貌はきれいで上品だとほめている。 c は、姫君と比較しな
いなら不足のない人だとほめている。 d は、姫君に比較して色白で座高が高
く堂々としていると述べている。 e では娘に心ひかれることはないかと断言し
ている。

【文章Ⅱ】の f は、大将の娘の着ている衣服についての記述。 g は、座高
の高さが堂々としている感じで、額は盛り上がって、目が大きいうえに、肌
は異常に白いという記述。 h は、親の欲目でしか美人には見えないだろうと
不美人さを強調している。 i も、姫君とは比較のしようがないほどの不美人
さを強調している。

㊸は、「ともに不美人だとする点は同じ」が不適當である。前記のように
【文章Ⅰ】では、「白う清げにあてやかなる有様なり。……これもかの人を見
ずは事欠けぬさまの人よ」とあり、不美人とは言っていない。さらに、【文
章Ⅱ】では、「親から見てもどうしようもない女性として表現している」が不
適當である。前記のように【文章Ⅱ】では「親の目にはよしと思ふらむと見
えたり」とあって、親までもが不美人とは思っていない。【文章Ⅰ】では、

上品な振る舞いはすばらしいと評価する」は、前記bのように適当である。

②は、「ともに美人であるとする点は同じ」が不適當である。前記のように「**文章Ⅱ**」には美人とする記述はない。それ以外の部分は適當である。

③は、「欠点が見当たらないほどすばらしいと評価している」が不適當である。前記のように、ほめて一方、けなしてもいるので、「欠点が見当たらない」とは言えない。それ以外は適當である。

④は、正解である。「姫君には劣っているもの」が前記cに対応している。「かの人を見ずは事欠けぬさま」と言っているように、「姫君に出会っていなかったら」と条件をつけているのだから、姫君には劣るということである。「色白で美しい女性だとそれなりに評価している」は前記bに対応している。「**文章Ⅱ**」では、姫君とは比べようがないほど不美人で魅力がないは、前記g・iに対応している。

第5問 漢文

【出典】

【詩】

「移住愛宕山後、賦示知己」。江戸時代の漢詩人六如（一七三四—一八〇一年）の作である、七言律詩。六如の詩集『六如庵詩鈔』に収録されている。六如は近江出身の天台宗の僧侶で、僧名を慈周と言った。師匠が今の埼玉県川越の喜多院に行くのに従い、江戸の街にも出向いて詩文を学んだ。その後生涯に渡って京と江戸を往来し、多くの学者や詩人と交遊を広めた。

【文章Ⅰ】

「孟子」。戦国時代の思想家、孟軻とその弟子たちの問答などを記録したもので、「仁義」や「王道」に基づいた、民を思いやる政治を理想とする。儒家の經典として後世に多くの影響を与えた。本文は「尽心章句・下」から採った。

【文章Ⅱ】

「漢書」。前漢の正史。後漢の班彪が書き始めたものを子の班固が受け継ぎ、その妹の班昭らが完成させた。「史記」の紀伝体（帝王や臣下の事跡を記して歴史を書き表す形式）にならない、前漢約二百年の歴史を記す。本文は、漢の高祖劉邦の異母弟である劉交の列伝「楚元王伝」から採った。

【本文解説】

【詩】

作者の六如は、今の滋賀県柏原に隠棲していたが、京都の愛宕山白雲山寺勝地院の院主を勤めることになり移住した。「移住愛宕山後、賦示知己」は、その時の心境を詠じたものである。

第一・二句では、これまでの人生において世間の評価を気にして生きてきた自分を振り返る。第三・四句では、俗世の塵埃にまみれた己を愛宕山の山谷自然が治してくれるであろうが、世渡り下手な己では貧乏生活は避けられないと詠う。第五・六句では、「**文章Ⅰ**」「**文章Ⅱ**」に記されている故事を踏まえて、俗世の評価は頼りにならず、その榮辱から距離を置く意志を詠う。第七・八句では、隠棲の地として選んだ愛宕山の風物の素晴らしさと、そこに移住できる自分の身の幸福を詠うことをもって結びとする。

【文章Ⅰ】

晋の馮婦は素手で虎を打ち殺すほど粗暴であったが、後には立派な紳士になった。その馮婦が郊外の野原を馬車で移動していると、人々が虎を狩っているところに出くわした。追詰められた虎が山の奥まった険しい所を頼みにして人々を威嚇するので、人々は誰も手出しできずにいたが、遠くに虎殺しで有名な馮婦の姿を認めると、馮婦に加勢を求めた。もとの粗暴な気質を戻した馮婦が車を降りて虎狩りに参加したので人々は喜んだが、志の高い立派な紳士たちは馮婦の紳士としてふさわしくない軽率な行動を嘲笑ったのであった。

この馮婦の故事は、孟子と弟子の問答の中で用いられている。齊国で飢饉が起こった時、孟子の弟子が「人々は、再び国の穀物倉庫を開いて救済の穀物を配るように、先生が王に進言してくださることを期待していますが、叶わぬ願いでしょうか」と尋ねた時、孟子はこの故事を引用し、「嘲笑された馮婦のようにはなりたくない」と断ったと伝えられている。

【文章Ⅱ】

漢の時代、学問好きの楚の元王は、学者である申公たちを迎えて厚遇していた。その学者の一人、穆生は酒を好まなかったので、酒宴が催されるたびにいつも元王は穆生のためにわざわざ甘酒を用意するという配慮を見せた。元王が亡くなり、孫の戊が即位すると当初は元王と同じく穆生のために甘酒を用意していたものの、時が経つと用意されなくなった。そこで穆生は、甘酒が用意されなくなったのは、王戊の自分に対する敬意が薄れたからであり、このままでは将来自分は刑罰を受けるかもしれないと、王戊のもとを去り出仕しなくなった。

この後、王戊は横暴な振舞いが多くなり、やがて滅亡に至る。もし王戊のもとに留まっていれば巻き添えにあう危険があった。すると穆生の出処進退（「身の振り方」）は、いわゆる「明哲保身（「聡明な人は道理に従って行動し、危険を避けて身を全うする）」の例だと言えるだろう。

【書下し文】

【詩】

愛宕山に移住して後、賦して知己に示す

霜根自ら省る満巔の新たなるを 栄辱の中間に此の身を置く

山砧水針俗を医了し 迂経拙緯貧を織り成す
車を下る馮婦の嘲りは須らく避くべし 體を設くる楚王の跡は已に陳し
納納たる乾坤風月の地 清時宜しく箇般の民を着くべし

【文章Ⅰ】

晋人に馮婦なる者有り。善く虎を搏つも、卒に善士と為る。則ち野に之く、衆の虎を逐ふ有り。虎嘲を負めば、之に敢へて撻づく莫し。馮婦を望み見ても、趨りて之を迎ふ。馮婦臂を擡げて車を下る。衆は皆之を悦ぶも、其の士たる者は之を笑ふ。

【文章Ⅱ】

元王申公等を敬礼す。穆生酒を嗜まざれば、元王酒を置く毎に、常に穆生の為に體を設く。王戊の即位するに及びて、常に設くるも、後設くるを忘る。穆生退きて曰はく、「以て逝くべし。醴酒設けられず、王の意怠る。去らずんば楚人將に我を市に鉗せんとす」と。疾と称して臥す。

【全文解釈】

【詩】

愛宕山に移住して後、詩を詠じて知己に見せる

頭すべてが霜柱のように白髪になった自分の生涯を振り返ると私は名誉と恥辱の間にこの身を置いてあくせくと生きてきた

これからは山々渓谷を医療針として世俗に染まった我が身をすっきり治して
紆余曲折しながら世渡り下手らしく貧しく生きよう

馮婦は車を降り虎退治をして嘲笑されたが、自分はその二の舞は避けなければならぬ

楚の元王は甘酒を用意して穆生に敬意をはらったが、そのような美風はもう過去のことで私を敬う人などいないであろう

万物を包摂する天地において風光明媚なこの愛宕山こそ
太平の世の中で私のような人間を住まわせるのによろしいと言えよう

【文章Ⅰ】

晋の人に馮婦という者がいた。虎を素手で打ち取ることができ（るほど粗暴であつた）たが、後には立派な紳士になった。ある時郊外の野に行くと、人々が虎を追い詰めていた。虎は山の奥まった険しい所を頼みにして威勢をはつてい

たので、(人々は)決して虎に近づこうとしなかった。(人々は)馮婦を遠くから見つけて、走って行って馮婦を歓迎した。馮婦は腕をまくりあげて車を降りた。人々は馮婦の活躍を喜んだが、志高い紳士たちは馮婦の軽率な行動を嘲笑した。

【文章Ⅱ】

元王は申公たち学者を敬い厚遇した。穆生は酒を好まなかったので、元王は酒を用意する(宴席の)たびに、いつも穆生のために甘酒を用意した。王戊が即位すると、いつも(甘酒を)用意してくれたいたが、後には用意するのを忘れるようになった。そこで穆生は退出して言った、「立ち去らなければならぬ。甘酒が用意されないのは、王の(私への)敬意が緩んだからなのだ。立ち去らなければ楚の人々は私を市場で首枷くびかぎをはめ(て処刑する)であろう」と。(そこで)病気だと偽って寝(て出仕しなかつ)た。

【設問解説】

問1 同じ意味の漢字を選ぶ問題

(ア) 設問には「最も近い意味」とあるが、実質同じ読みの語句を選ぶ問題である。「已」は、「もうすでに」——してしまふ」という完了の意味を示す副詞として「すでニ」と読む。他にも動詞として「やム(ニ止める・終わる)」、限定を表す助詞として「のみ(ニだけ)」と読む用法もあるが、本文では「已陳」と、述語「陳し」を修飾する位置にあるので、「すでニ」と読むのが適当である。よって、**正解は④「既」**(二)である。他の選択肢については、①「固」は「もとヨリ(ニもともと・言うまでもなく)」、②「必」は「かならず」、③「猶」は「なホ(ニそれでもやはり)」、④「各」は「おのおの(ニそれぞれ)」などと読む。

(イ) 「將」は、その時点での未来を示す再読文字として「まさニ——(セ)ントス(ニ今にも)——しようとする・——だろう・——しよう」と読む。選択肢③「且」は「かつ」「しばらく」などとも読むが、再読文字として「まさニ——(セ)ントス」と読む、「將」と同じ用法がある。よって、**正解は⑤**である。他の選択肢については、①「令」は使役「シム(ニさせる)」、②「被」は受身「る・らル(ニられる)」、④「如」は仮定「もし・比況」(とシ(ニようだ))、⑤「尚」は副詞「なホ(ニそれでもや

はり)・動詞「たつとブ(ニ尊ぶ)」などと読む用法がある。

問2 空欄補充及び漢詩の知識の問題

漢詩は偶数句末で漢字の音(ニ響き)を合わせる、つまり押韻する決まりがある。また、七言絶句・七言律詩では、初句末でも押韻している場合が多い。押韻する文字を韻字という。この【詩】の韻字は、初句末「新shin」・第二句末空欄X・第四句末「貧pin」・第六句末「陳chin」・第八句末「民min」である。以上のように、韻を確認するには、漢字を音読みして、ローマ字表記し、初めの子音を取り除くと理解しやすい。したがって共通の韻は「E」である。選択肢に挙げられた漢字の音はそれぞれ①「故go」、②「人jin」、③「子shi」、④「近kin」、⑤「身shin」であり、韻が不適当な①・③は除外される。

次に、それぞれの選択肢の末尾を見ると、①・④「七言絶句」、③・⑤「七言律詩」、②「七言古詩」と、詩の形式であることが確認できる。入試における漢詩の形式は、全体が四句の詩は「絶句」、八句の詩は「律詩」、それ以外は「古詩」と考えてよい。本文の【詩】は、一句が七文字で、全体が八句であるので、「七言律詩」である。形式を「七言律詩」としているのは、③・⑤である。

よって、**正解は⑤**である。

問3 読み方の問題

ポイントは、「須」の用法である。「須」は再読文字として「すべからク(ス)ベシ」と読む用法があり、「しなければならぬ・——する必要がある」などと訳出する。傍線部A「須避」は「避けなければならぬ」という意味で、「須らく避くべし」と書き下すことができる。よって、**正解は⑤**である。因みに他の選択肢の読みかたに該当する再読文字は、①「まさニ——(ス)ベシ」は「当・慮」、②「なホ——(ノ・ガ)ごとシ」は「猶」、③「なんゾ——ざル」は「盍」、④「いまダ——ず」は「未」である。

問4 内容説明の問題

まず、【文章Ⅰ】の傍線部Bまでの内容を確認する。「素手で虎を殺すこと

ができる馮婦が郊外に行くと、人々が虎を追い詰めていたが、山の奥まった険しい所を頼みにした虎に手出しできずに誰も虎に近づこうとしなかった」という内容である。次に、傍線部Bを現代語訳する。直前の「莫^ニ之^ヲ敢^テ攫^ル」は「人々は決して虎に近づこうとしなかった」という意味なので、「望^ミ見^テ馮婦^ヲ」の主語も「人々」であり、「人々は馮婦を遠くから見つけて」と理解できる。したがって③・④「虎」が、……は不適当である。それを受けて続く「趨^リ而^テ迎^フ之^ヲ」は「人々は馮婦のもとに走り寄って馮婦を迎えた」と訳出できる。

さらに、傍線部Bの直後には「馮婦攘^カ腕^ヲ下^ル車^ヲ。衆皆悦^ブ之^ヲ」と、馮婦が腕まくりして車を降りてくるのを人々が喜んだ描写があり、虎に手こずっていたところに虎退治で有名な馮婦がやってきて虎を倒してくれるであろうと人々が期待していることが読み取れる。したがって、①「彼（＝馮婦）」を追い払おうとした」、②「（衆）が」虎に追われて」は不適当である。よって、正解は③である。

問5 返り点と書き下し文の問題

まず、傍線部Cには、疑問・反語文を構成する副詞（「何ぞ」・「安くんぞ」など）や助詞（「乎」・「哉」など）がないので、文末を「んや」で結ぶ反語文にはならない。したがって②は不適当である。

次のポイントは、重要語「毎」と「為」である。

| | | |
|-------------------|----|----------------|
| 「毎」 | 読み | つねに―― |
| 毎 ^ツ ねに | 訳 | いつも――する |
| 「為」 | 読み | ……（する）たびに（いつも） |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……のために |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……のために……に対して |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……となす |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……とする……と思う |

| | | |
|-------------------|----|------------|
| 為 ^ニ …… | 読み | ……となる |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……になる |
| 為 ^ニ …… | 読み | ……をなす |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……をする……を行う |
| 為 ^ニ …… | 読み | ……を治める |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……をさむ |
| 為 ^ニ …… | 読み | ……をつくる |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……を作る |
| 為 ^ニ …… | 読み | ……たり |
| 為 ^ニ …… | 訳 | ……である（断定） |

選択肢の読みはすべて右に示す文法的用法には適^{かな}っているので、文脈に合った返り方・読み方をしているものを選択しなければならぬ。

①「元王……、常に穆生と為す」の訳は「元王は……、いつも穆生とした」、あるいは「元王は……、いつも穆生だと思った」となるから不適当である。また、後にある穆生の会話部に「醴酒^レ不^レ設^ル、王之意^ニ忘^ル」とあるから、甘酒を用意するのは王である。したがって原文に「穆生設^ク醴^ヲ」と返り点を施して④「穆生の醴を設くる」、⑤「穆生の醴を設くる」のように書き下すと「主語＋述語」の構成となり、「醴」を用意したのが穆生となる。よってこれらも不適当である。

「文章Ⅱ」の前書きには、学問好きの元王が学者を厚遇したことが記されており、傍線部Cの直前には「穆生不^レ善^ク酒^ヲ（＝学者の穆生が酒を好まなかったの）とあるので、「為穆生設醴」とは、学者に敬意を払う元王が、酒を好まない穆生のためにわざわざ甘酒を用意したと理解できる。この内容に合致する読み方は③「穆生の為に醴を設く」であり、傍線部C全体「元王酒を置く毎に、常に穆生の為に醴を設く」も、「元王は酒を用意する（宴席の）たびに、いつも穆生のために甘酒を用意した」と解釈でき、文脈に合う。よって、正解は③である。

問6 理由説明の問題

まずは傍線部Dを解釈する。「可^シ以^テ……矣」は「……できる……して

よい」と訳出するのが一般的だが、ここでは直前に「穆生退^{キチウ}日」とあり、会話部分の直後に「称^{シテ}疾^{シテ}臥^{シテ}（病気だと偽って寝て出仕しなかつた）」と続いていることから、「可^シ以^テ逝^ク矣^{（病気がひどいから、）}」は「立ち去るべきだ」「立ち去らなければならない」と解釈できる。その理由としては、会話部分の前に「後忘^レ設^ル焉^{（後で忘れるな）}」と、王の戊が穆生のための甘酒を用意しなくなったことが記され、穆生の会話の中にも「體酒不^レ設^{ケラレ}、王之意怠^ル（甘酒が用意されないのは、王の「私への」敬意が緩んだからなのだ）」とある。つまり、元王とは異なり、新王の戊が自分のために甘酒を用意しなくなったのは、学者である自分に対する敬意を失っているためであると穆生は考えたのである。したがって②「政治に対する情熱を失った」、③「自分は申公ほど評価されていない」、④「新王の戊が自分を処刑する」、⑤「健康を損なって朝廷に参内できなくなる」は不適當である。よって、正解は①である。

問7 心情説明の問題

【文章Ⅰ】は、粗暴だった馮婦が立派な紳士になったものの虎退治のために一肌脱いだために、他の「為^レ士者^{（士族）}」から笑われたことを伝える。その故事を踏まえ【詩】第五句では、「下^ル車馮婦嘲^リ須^ク避^ク（下る車馮婦を嘲らねば避かぬ）」と作者は志の高い人々からの嘲笑を回避しなければならないと詠う。【文章Ⅱ】は、学問を好む楚の元王が学者を厚遇し、酒を好まない穆生という学者のためにわざわざ甘酒を用意したことを伝える。その故事を踏まえて【詩】第六句では「設^レ體楚^{（甘酒を設けた）}王跡已^レ陳^{（楚王の跡は）}」と、そのような学者を厚遇する美風は過去のこと、自分のような知識人を尊敬する人などにはやいと詠うのである。すなわち、世の中の恥辱や栄誉から離れることを詠っているのである。

また、【詩】第二句では栄誉と恥辱の中に我が身を置いてきた半生のことを詠い、第三句で「山砭水針医^シ了俗^{（山砭水針で俗を医した）}」と、治療器具に見立てた山谷自然によって「俗」つまり自分の俗っぽさを治療すること、第四句では世渡り下手な作者が貧乏暮らしすることに触れる。

漢詩は、ふつう末尾の二句で最も述べたい感情を吐露する。その第七・八句は、移住先の自然豊かな愛宕山で静かに隠棲することに対する好ましい心境を詠うことで締めくくるのである。したがって③「俗世の快樂をすべて失う悲しみ」、④「孤独に老いて死んでゆく決意」は不適當である。第八句に

「清時（太平の世）」とあるから、①「戦乱の世の人々を救う」も不適當である。第三句に「医^シ了俗^{（俗を医した）}」（世俗に染まった我が身をすっかり治して）」とあるから、治すのは「生き方」であって文字通りの病気ではない。したがって⑤「身体の健康を得る喜び」も不適當である。よって、正解は②である。